

自分であることを好きになる
楽しさを感じてほしい――

ファッションモデルの志願者が、地元で活躍する場を増やそうと、モデル事務所を設立した青島さん。モデル講師やショーの演出を手掛けるほか、障害のあるモデルを起用したファッション誌も刊行し、誰もが輝けるステージの創造を後押ししています。

【背中を押されて東京へ】

自身も、現役ファッションモデルの青島さん。夢を追いかけるきっかけとなったのは、昭和の歌姫への憧れと高校の恩師の言葉でした。

「幼少期から、自分に自信を持ってなかった私ですが、テレビで美空ひばりさんが堂々と歌っている姿を観た時、すごく感動したんです。以来、とにかくカッコよくて

強い女性になりたいと思いました。高校生になり、将来を模索する中で、人前が出る職業に憧れてはいたものの、やはり自信を持てずにいました。それを観ていた高校の担任

が勧めてくれたのが、ファッションモデルでした。一人で悩んでいたなら、きっと決断できなかつたと思います。背中を押してもらえたことで覚悟が決まり、17歳で東京の事務所に飛び込みました」

技術の必要性がまだ根付いていないと感じ、その活躍の場を創ろうと、地元で事務所を設立しました。女性をスカウトする際の基準は、ありのままの魅力で、障害の有無は関係ありません。モデルとして



スタジオ エリカ
モデル事務所「studio Erika」代表
青島えりかさん (東町)

【自分を褒める機会を創る】

昨年12月、青島さんは静岡市内の児童福祉事業者と協力し、障害のあるモデルが出る演劇のファッション専門誌「MISFITS」を創刊しました。「静岡には、モデルの魅力や

人前に立つ時ほど、自分を褒めてあげられる機会はまだ。同時に、衣装のデザイナーやブランドの大きな思いを背負う立場でもあります。だから、やるからには全力を尽くす。そこで得た達成感と責任感と

自己肯定感は『世の中に必要のない人間なんていない』と教えてくれるはずですよ」

【才能を島田から発信する】

「モデルには、スタイルが重要です。でも、より大切なのは『自分らしさ』という意味でのスタイル。このまちには、素敵な女性がたくさんいます。美への憧れを持ってもらうとともに、自分であることが好きになる気持ちを抱いてもらうお手伝いができればと、活動しています。姿勢や所作、周囲への感謝だけでなく、美しいものを美しいと思える感性を身に付けられるのがモデルです。近い将来、子どもの習い事としての選択肢にモデルが挙がるよう、責任と夢を持ち、その育成と魅力発信に取り組んでいきます。そして、その秘めた才能で、皆さんを感動させる機会を、創っていきたくいですね」

障害や性別を問わず、互いを補い合えば「ありがと」が増えると話す青島さん。まるでランウェイを闊歩するように、地域の優しく元気な未来を、真つすぐ見据えています。



Shimadajin File #118

Story 島田人

ハンディキャップ・モデルが活躍するファッション専門誌「MISFITS」の紙面

